

令和３年度 第１回インクルーシブ教育（支援児包括教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和３年６月２５日（金）１４時～１５時３０分

□開催場所：駅北庁舎４階 大ホール

□出席者（敬称略）

- ・委員：宇野宏幸 柴田勇夫 土本雄司 大竹陽平 水野浩庫 保義博 岡英樹
高木千穂子 成瀬輝正 長谷川邦代 景山祐子 石黒祐子 吉田香奈子
- ・事務局：渡辺教育長 高橋副教育長 林教育次長 久野教育研究所長
尾辻春香 後藤正樹

１ あいさつ

教育長あいさつ

２ 報告・検討内容

（１）報告事項について

事務局

令和３年度の基本施策１から６の進捗状況について説明

委員

多治見市に異動になり、一番嬉しかったのはスクールソーシャルワーカーが週に１回学校を訪問し、支援の必要な家庭を、市役所や子ども相談センター、放課後デイサービスなどにつなげていただけることです。スクールソーシャルワーカーには本当に感謝をしています。

委員

初めて、この委員会に参加をしました。インクルーシブ教育という言葉や、多治見市はインクルーシブ教育を推進しているということを知っていましたが、内容については十分に知りませんでした。私たちが、この委員会を通じて学ぶことによって、周りの人たちに発信できるのではと考えています。周囲の人たちにインクルーシブ教育について尋ねてみましたが、知らない人が多いように感じたので、こうした取組を多くの人に知ってもらえるといいと思いました。また、先ほど、話があったスクールソーシャルワーカーのように、困ったときに相談できる窓口を多くの方が知っているといいな、と思いました。

委員

就学する時に、他県から多治見に引っ越してきました。全く多治見市の小学校のことが分からなかったときに、子ども支援課の方が何度も声をかけてくれ、学校見学にも一緒に行っていただき、なんて親切な市なんだろうと思いました。また、小学校の先生や市役所の方が、幼稚園の先生に熱心に聞き取りをされて、子どもに適切な就学先を一緒に考えてくれていることを実感しました。

委員

現在、巡回相談に参加をさせていただいています。園児が、どういった学校に入っただけなのではなく、どのように学んでいったらいいのかといった視点で、就学先を考えています。また、園と発達支援センター、保護者と三者が情報を共有して、どういった学び方がいいのかを話題にしています。

委員

以前は、相談をする機関が全くなく、保護者があちこち探したり、福祉課に出向いたりしていました。10年の間に、福祉の分野では相談支援のスキルが向上しており、誰もが相談できる場があることが大切だと思っています。また、事業所としても、モニタリングをしたり、「未来の生活を考える会」を作ったりしながら、自分の将来を考える機会を設けるようにしています。支援ができる体制ができてきたことが、福祉が広がってきた成果であると考えます。

委員

保護者から「知らなかった」という声が上がるということは、いくら取り組んでいても、まだ不十分だと考えなければいけないと思います。どうしたら、保護者に情報が伝わるのかといったことを考える必要があると思います。市役所の方も異動があるため、新しい担当になると、分からないことも出てきます。「この部署にはこういった相談が来ますよ」ということを次の担当に引継ぎ、みんなが意識することも大切なことだと思います。

相談できる場所は、増えてきています。一番相談をしたいのは、学校卒業後のことで、早い段階で保護者と話題にしていきたいと思います。子どものことを話しながら、保護者自身の相談にもものっていただけるのは、こういった機関であるため、保護者にも知っておいてもらおうとよいと思いました。

(2) 検討事項・意見交流

基本施策1 一人一人の教育的ニーズの把握と、それに応じた指導・援助の充実

・多治見市のGIGAスクール構想について

事務局

- ・デイジー教科書の体験
- ・多治見市のGIGAスクール構想について

委員

支援の必要な園児については、視覚から入ることが有効であり、言葉だけの指示では嫌になってしまうことも多いです。活動の中でも視覚的支援を使い、みんなが分かることを意識して教材を考えています。準備が大変ですが、例えば、大型テレビを使い、大

きく提示ができると、子どもの理解も深まってくると思います。

委員

教科書の文字を追いながら音読ができなかったり、黒板の文字を書き写したりすることに困難を抱えている子がいます。苦手意識があって時間がかかってしまったり、嫌になってしまったりする前に、楽しく学ぶ機会を作り出すことができるようになると思います。

委員

目で文字を追うことが難しい児童にとっては、デイジー教科書やデジタル教科書のハイライト機能が有効であると考え、使っている児童もいます。個別指導の場では使いやすいのですが、通常学級のように大人数の中で使うには、どうすればいいのかを先生たちと考えていきたいです。

委員

「教科書の何ページを開いてください」と口頭で指示を出すと、忘れてしまったり、教科書を開いている間に授業が進んでしまったりすることがあります。画面上で、「教科書のここだよ」と具体的に示すと、後からでも指示を確認することができます。また、子どもたちの意見を集約する機能は、教師が子どもたちの理解度の把握にも有効であると考えます。

委員

指示された課題が終わってしまったときや、特別支援学級で他の児童を支援しているときに、何をしたいのか分からない時間が生まれてしまうことがあります。そういうときに、アプリを使って自分で学習ができると、時間を有効に活用することができます。

委員

先日食育のアンケートで使いましたが、瞬時に子どもの回答を把握し、グラフで表示することができます。ただ、使うことが目的にならないようにと、学校では話題にしています。

委員

I C T機器に慣れないので、昨年度のオンライン授業も本当に大変でした。子どもが保育園の時に、タブレット端末をフラッシュカードのようにして使ったことで、本人も楽しむことができたり、友達も一緒にやってくれたことで関わりを持ったりすることができました。字を書く時間は減ってきていますが、書くことが苦手な子からすると、「書くことが嫌だから学びたくない」と思うのではなく、指先で操作できたり、見る楽しみがあったりしてもいいと思います。

親の立場では、家にI C T機器を持って帰ってきても、どうしていいか分からない面もありますが、時代の流れに乗っていかないといけないな、ということを感じました。

また、学校で、分かりやすく支援が行われているということに、本当にびっくりしました。

委員

学校の中でタブレット端末を導入することが、大きな可能性を秘めているということに改めて感じました。GIGAスクール構想が、新型コロナウイルスの関係で前倒しになり、急速に学校現場に導入されました。学校現場も大変ですが、こういう機会を捉えて、また、特別支援教育と絡めて、インクルーシブ教育を進めていくきっかけにしてほしいと思います。

GIGAスクール構想は、障がいのある子も、学校の中の学びに参加できる、授業の中で分かったという実感を得られる、そして、自分なりの学びを作っていくことができるのではないかと考えます。そうすると、タブレット端末は強力な「武器」や「道具」になりますが、使うこと自体が目的ではなく、道具としてどう使いこなしていくかということが、先生たちにとっての命題になってきます。子どもたちにとっては、デジタル教科書が背景や文字の色を変えたりできるように、個人に合わせた設定ができることがよい点です。子どもたちは、道具として使いこなす力を身につけ、どのように学んでいけばよいのかを知る子どもに育ててほしいです。こういったことが、社会的自立につながると考えます。特に、発達障がいのある子どもたちは、学び方を学ぶ、自分が得意な分野を発見することにつながるとよいと思います。

通常学級における特別支援教育は、授業におけるユニバーサルデザイン化が進んでいますが、そのねらいは、どの子にも分かりやすい授業を目指すことにあります。ICT機器を活用することで、自分の意見や感想を学級のみんなに紹介する機会を簡単に設定することができます。これまでは、自分の意見や感想の表現方法も言葉が中心でしたが、そのことに対して困り感を抱えている子も多かったです。

いろんな学ぶ方があるということを提供できることが、ICT機器のいいところであると考えます。その波及効果として、これまでは先生が板書をして、子どもたちが書き写していたが、ICT機器の活用によって、書字障害のある子どもたちにとっては困難さを減らすことができ、合理的配慮につながると考えます。テクノロジーで教育を進めていくことをEDTEC（エドテック）と言われますが、学習の個人化、パーソナリ化ができるようになってきます。発達障がいのある子どもたちには、特別に指導計画を作ってきましたが、もう特別なことではなくなってくると思われます。

子どもたちは、楽しくタブレット端末を使って学んでおり、特に発達障がいのある子どもたちは、集中して取り組むことができます。その背景にはICT機器の強みが発揮できるということがあります。例えば正解、不正解の判定はすぐにでき、次の問題にすぐに取りかかることができます。また、クラスの中で、関係作りを行うことも期待できます。それぞれの子どもたちに表現をしてもらい、みんなで共有をしたときに、解き方は、みんな違っていることを知ることもつながることを、ぜひ先生方にも伝えてほしいと考えます。